

学研 おんがく通信

Web版も
あるよ★

♪バックナンバーが
閲覧できる!
♪ウェブならではの
情報が満載!

4月号

2013
年3月
25日

Gakken

(株)学研パブリッシング 音楽出版事業室
〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8
Tel. 03-6431-1220

学研 おんがく.net <http://gakken-publishing.jp/ongaku/>

学研 電子ストア <http://ebook.gakken.jp/gstore/>

遡ること〇〇年、新しい制服に身を包み、迎えた高校の入学式。桜が満開でした。ここがわたしの靴箱か、と新学期に心躍らせ、靴を履き替えようとした、その時…。そう、気づいたのです。上履きを忘れたことを…。毎年桜を見ると思い出す、上履きの思い出。(め)

定番教本ルネッサンス!? ～ディスクバリ「チェルニー・ブルクミュラー・ハノン」～

2013年、ピアノ教育界ではちょっとしたメモリアル・イヤー・ラッシュです。日本ではザ・定番! 今もなお根強い人気を誇る『バイエル・ピアノ教則本』のフェルディナンド・バイエルの没後150年、さらに中級の“練習曲集”といえば外せないカール・チェルニーの生誕222年でもあります。余談ですがチェルニーは猫好きだったそうですので、ニャンニャンニャン♪でさぞかし喜んでいることでしょう…。だからという訳ではもちろんありませんが、最近、『バイエル』をはじめ、『チェルニー』『ブルクミュラー』『ハノン』といった、いわゆる“定番”の練習曲集が再び注目を集めているように思えます。2013年1月号でも取り上げましたが、これらの教本が日本に入ってきて130年以上。以来脈々と使われ続けるこれらの教本たちの昨今感じられる“ルネッサンス”の動きは、安定感だけではなく新たな魅力を再発見するチャンスかも!?

そこで! 今回はこれら練習曲集の作者にスポット・ライトを当ててみたいと思います。

Carl Czerny (1791-1857)

——ベートーヴェン愛!? 古典とロマンの間で

“ツェルニー”と発音・表記されることも多いですが、ドイツ語の発音により近いのは“チェルニー”。綴りは「黒」という意味のチェコ語から来ているのだとか(祖先を遡ればボヘミア出身とも)。10歳の時にベートーヴェンにその才能を認められ、演奏家として弟子入りしました。ピアノ協奏曲第1番〈皇帝〉の初演を行ったのも彼です。ただ、チェルニー自身は演奏家としてよりもむしろ師・ベートーヴェンの「ピアノ演奏法」の理念を伝えることに情熱を傾け、膨大な『練習曲集』を作曲し、リストをはじめとする大家を教育したのです。彼の練習曲には、古典派の様式美のなかにロマン派の叙情性を感じられ、音楽史上の単なる“時代のつなぎ役”ではない、独自の足跡をくっきりと残しています。

Johann Friedrich Franz Burgmüller (1806-74)

——「ノルベルトのお兄ちゃん」

“ブルクミュラー”といえば、デュッセルドルフ市音楽監督でもあった父親の“ヨハン・アウグスト・フランツ”と弟の“ノルベルト”が音楽史にその名を残す存在です。特にノルベルトは、かのシューマンもその才能を高く評価するピアニスト・作曲家で将来を嘱望されていたのですが、わずか26歳で夭折。親友のメンデルスゾーンが〈葬送行進曲 Op.103〉を書いてその死を悼むほどでした。そんな家族にあってヨハン・フリードリヒ・フランツはピアノ小品の作曲家、サロンのピアニストとして活動。音楽史上はともかくも、200年後の極東・日本の私たちにはなくてはならない、詩情豊かで愛らしい25曲と18曲から成る『練習曲集』を残しています。

Charles-Louis Hanon (1819-1900) ——アッシュの憂鬱「だから発音、違うってば!」

テクニク教本といえば、私たち日本人は“ハノン”でなじんでいます。フランス語は「H(アッシュ)」を発音しないので“アノン”と呼ぶのが実は正解。日本へ入ったときに「H」を発音するドイツ語や英語の楽譜で来てしまったが故の不運なのですが、もしかしたらお墓の下で(苦笑)なのかも…。彼の『60の練習曲による超絶技巧ピアニスト』は、それまでのテクニク教本の定石、クレメンティの『グラドゥス・アド・パルナッスム』(ドビュッシーがこの練習曲をつまらなさそうに弾く娘の様子をピアノ曲にしています)を超え、現在も広く「テクニク教本」として使われています。純粋にフィンガートレーニングを究めるための教本ですが、驚くほど実に合理的にさまざまなパターンが組み合わせられていることにお気づきですか?

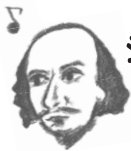
これを機会に! ぜひもう一度、楽譜を取り出して見直してみたいかがでしょう♪(か)



ぴあのどリーむ情報

今年発刊20周年を迎えた『ぴあのどリーむ』シリーズ。これを機に、『ぴあのどリーむ』で力をつけてきた生徒さんのための新クラスが登場しました! 初級の終わりから中級導入にかけて必須の教本『ブルクミュラー』『ハノン』『チェルニー』、『ぴあのどリーむ』のコンセプト“夢いっぱい、楽しく、親しみやすく”そのままに、この3冊が「中級導入クラス」として新たにシリーズに加わります。表紙絵の作者はもちろん、永田萌さん。子どもたちに希望と自信を与え、ながくピアノを続ける原動力となる曲集です! (か)





シェイクスピアを愛したヴェルディ、「オテロ」のお話

4月26日はシェイクスピア(1564~1616)が洗礼を受けた日!!



英国の偉大な劇作家ウィリアム・シェイクスピアの正確な誕生日はわかっていませんが、洗礼を受けたのが4月26日という記録が残っているそうです。そのシェイクスピアがこのほか音楽を愛したことは、記録にはなくても、彼が遺した数々の傑作を続けばよくわかることです。たとえば、誰もが知っている『ヴェニスの商人』、第5幕の冒頭は比類なく美しい場面ですが、そこにある台詞。得も言われぬ月夜の晩、ユダヤ人金貸しシャイロックのひとり娘ジェシカに恋人のロレンゾが語ります。

<心に音楽を持たない人間、美しい調べにも心を動かされない人間は、謀反・陰謀・略奪にしか向いていない。／そういう人間の心の動きは闇夜のように鈍く、感情はこの世と地獄の境のように暗い。>(松岡和子 訳)

ここで“心に音楽を持たない人間”とされる典型を、シェイクスピアは同じヴェニスを舞台にした別の傑作悲劇で登場させています。そう、『オセロ』のイーゴ、高潔な將軍オセロを、その貞淑な妻デズデモナのありもしない不倫疑惑をでっち上げて夫婦ともども破滅に追いやる、あの非道のイーゴです。『ヴェニスの商人』のシャイロックとは異なり、まったく感情移入のしようのない極めつけの悪人です。

今年が生誕200年となるイタリアの作曲家ジュゼッペ・ヴェルディがシェイクスピアに心酔していたことは有名です。オペラ化したかった作品は多かったようですが、実現できたのは3作で、そのうちのひとつが『オテロ(オセロのイタリア読み)』なのです。ヴェルディの作品中随一の傑作と言えるかもしれません。シェイクスピアのストーリーの神髄を凝縮して音楽化しています。“心に音楽を持たない”イーゴがじわじわと將軍オテロを追いつめていくさまが、聴いていて辛くなるほどに、音楽のドラマとして表現されているのです。

それは、およそ250年の年月を隔てた天才と天才とが、火花が飛び散る真剣勝負のように切りむすぶ姿をも髣髴とさせるようです。(え)



♪セルゲイ・ラフマニノフ
(ロシア/作曲家、ピアニスト/1873.4.1生)

♪ジュゼッペ・タルティーニ
(イタリア/作曲家、ヴァイオリニスト/1692.4.8生)

♪モンセラート・カバリエ
(スペイン/ソプラノ歌手/1933.4.12生)

♪ズービン・メータ
(インド/指揮者/1936.4.29生)

今月のあかね先生



2月某日、あかね先生のもとに、雑誌『AERA with Kids』(朝日新聞出版)から取材の依頼が…。『大人になっても役に立つか』を育む習い事の取り組み方という特集コーナーです。「ピアノから得られる力とは?」という質問に対するあかね先生の回答は「辛抱強さ」「継続力」「計画する力」。…確かに!

他にも、サッカー、将棋…さまざまな習い事の視点から書かれています。既に発売されていますので、ぜひ書店でご覧になってみてくださいね。(いも)

『AERA with Kids 春号』(朝日新聞出版) 定価:680円(税込) 発売中!!

今月のセミナースケジュール

4/10(水):[神奈川県/藤沢]有隣堂 藤沢ミュージックショップ
『子どもが飽きないリズムのレッスン<全2回>-導入編-』

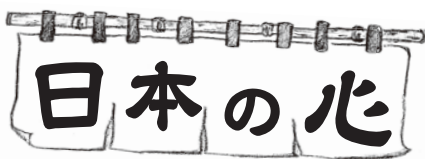
大人の科学×音楽最前線

旧式のオープンリールデッキと現代のコンピュータを融合させて、「楽器」として演奏するプロジェクト Open Reel Ensembleが初の書籍『回典』を刊行しました。巻頭では、リーダーの若き天才音楽家の和田永氏と、現代の“知の巨人”松岡正剛氏のスペシャル対談が実現。一音楽界におとずれた急速なデジタル化は、私たちがこれまで感じていた音と感情の関係性にも変化をもたらしました。失われゆくアナログの中にある、何か。それは人間のプリミティブな欲求を満たす、ざらついた、たしかに手触りのようなもの。録音と再生、音と感情、生命、そして宇宙に至るまで、この二人だからこそ生まれたエキサイティングな内容は必見です。録音メディアの歴史を辿りながら、様々な豪華ゲストと対談していく第一章、オープンリールアンサンブルを徹底解剖する第二章、まだ見ぬ未来の可能性を探った第三章。付録のDVDには、彼らの今作限りのプロジェクト Open Reel Orchestra を映像化したドキュメント+ライブを収録。超一流の豪華スタッフ陣で制作したライブ映像は圧巻です。(さ)



回典~En-Cyclepedia~
(DVD付) 定価:2,400円(税込)

昭和30年代まで子どもたちは、神社の境内や校庭、空き地などでいろいろな遊びに熱中していました。男の子たちはビー玉、メンコ、ペーゴマ。女の子たちはまりつきやなわとび、あやとり、おはじきなど。そうした遊びのなかで、歌は欠かせない道具のひとつでした。



♪大波 小波 ぐるりと回って猫の目

♪あなたがたどこさ ひごさ ひごどこさ くまもとさ~

♪ひらいた ひらいた なんのはなが ひらいた~

〈なわとびうた〉〈てまりうた〉〈輪あそびうた〉などの「わらべうた」、古くは平安時代の文献にも登場するようですが、広く歌われるようになったのは江戸中期以降といわれています。独楽やはねつき、お手玉など、子どもたちの遊びの種類が増えたからでしょう。また〈えかきうた〉や〈なわとびうた〉などは、明治以降に登場しました。

ところで「わらべうた」は伝承童謡なので、地方色が顕著に出てきます。たとえば一般的に歌われる「ひらいたひらいた」の花は「れんげの花(蓮華=はすの花)」ですが、名古屋では「牡丹の花」、山形では「ねんぎ(葱)の花」、三重の伊勢あたりでは「げんげん花」などと歌われています。あなたの歌った「ひらいたひらいた」はどのような花ですか? (く)

*参照 「わたしの心の歌-春」(学研パブリッシング 刊)

つむりの練習手帳

なんとかかふ読みが間に合ったみたいで、つむりはコンクールを受けることになりました。そしたら、突然レッスンがハードになったらしく、先生のことはあんまり言わないつむりが「こんなにキビシかったっけ…」ってつぶやいてた。その場にいたママも「びっくりするくらい急にコワくなった」って言うけれど、つむりが練習してるそばにいる近ごろのママもコワさがグレードアップしてます。つむり、がんばれ。(トホホお兄)

つむり現在の楽譜(コンクールにチャレンジ中!)

- ☆こどものハノン ⊕ (学研パブリッシング)
- ☆ブレ・インヴェンション(全音楽譜出版社)
- ☆キックオフ!(音楽之友社)
- ☆こどものソナチネ1(学研パブリッシング)

お詫びと訂正 「学研 おんがく通信 2013年3月号」Happy Birthday」コーナーに於きまして、掲載に誤りがありました。正しくは以下のとおりです。読者の皆様へ深くお詫び申し上げますとともに、ここに謹んで訂正させていただきます。

■8行目 ×誤「オーストラリア」→○正「チェコ」

糸桶集部のつむりってー!

ミニマル、エレクトロニカ、アンビエント、ノイズ…そういうジャンルも大好きなんです。深夜のひとりドライブのBGMにぴったり。(行き先は、ラーメン屋さん…) (@の)

Twitter [@gakken_music](https://twitter.com/gakken_music) 日々のよしなしごとや最新情報をツイートしています!